

**\* ゴーチエ子午環室階下で玉屋の水平検査機発見**

アーカイブ室新聞第358号(2010年7月8日)に「明治16年(1883年)大陰出沒時 計算簿発見」という記事を書いた。この「大陰出沒時計算簿」を提供して下さったのは、元東京天文台子午線部に長くお勤めであった原寿男氏が、ゴーチエ子午環の地下にたくさんあった1冊を記念に持ち帰ったもので、まだ同じようなものがたくさんあったように思う、と言われたので、ゴーチエ子午環室の階下を探検しなおした際、表記の物を発見したもので、写真1の木箱に入っていた。木箱を開けたところが写真2である。



写真1 ゴーチエ子午環室階下の棚にあった木箱



写真2 写真1の木箱を開けたところ

この木箱の中には、写真2に見るように、何やら重厚な器械が入っていた。木箱には「東京天文台 No.1 水平検査機」と書かれている。面白いものを発見したと喜んだ。

自分の部屋に持ち帰り、埃だらけの木箱を掃除し、中から水平検査機なるものを取り出した。組み立て図面（写真3）も入っていた。図面には「バンベルヒ型レベルテスター」となっている。

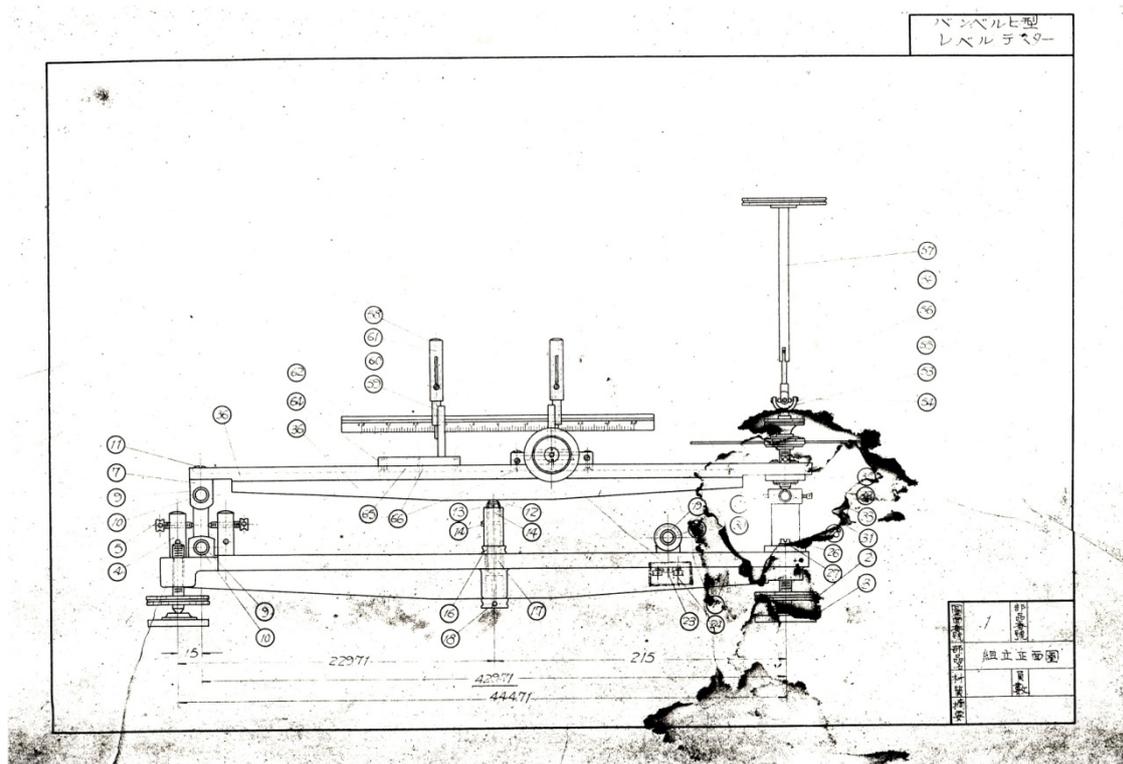


写真3 玉屋の水平検査機の組み立て正面図

今まで、玉屋の製品にはいくつか出くわしている。日本の古い測量器械のメーカーである。インターネットで何か情報が得られないかと「玉屋の水平検査機」と入れて検索したところ、面白い記事に出くわした。「小説」として書かれている「風吹け、波たて」=依田勉三 十勝を拓（ひら）く=、著者：松本晴雄の第3部「拓殖編」（51～58歳）の3章「初孫の知恵（明治41年 56歳）」の「四月「リク、伊豆に見えず」」の18日の文章に、「十八日、勉三は上野へ着き、朝七時に下谷の井筒屋へ投宿し、午後は善吾を訪ね、紺屋町の泉屋へ行くが、落ち合うはずの佐二平はいなかった。そのため銀座で食事して半紙を購入し、玉屋で水平器を見て泉屋へ戻れば佐二平がいた。そして用談していると善吾も加わり、勉三は夜十一時、小石川へ行って伯父宅に寝た。」、という記述があったのである。この小説については全く知らないが、明治41年に玉屋の水平器という言葉が出てきたことに驚いている。

筆者が組み立ててみたところが写真4である。どうも部品が欠けているようで、図面の右端の54番から56番の部品が無い。これは水平を調節するハンドル部分のようである。



写真4 箱から出し、組み立てたところ

組立正面図はあるが、取説のようなものは一切ない上に部品がそろっていないので、どのように使うのかさっぱりわからない。なかなかの重量物である。本体の名盤（写真5）を見て、製作年が昭和18年ということに驚いた。



写真5 本体についていた名盤



写真6 木箱の名盤

もともと、木箱にあった名盤（写真6）から、玉屋の製品であることから貴重な測定器であろうことは想像できていた。写真7は組み立てたところを上から撮影したものである。

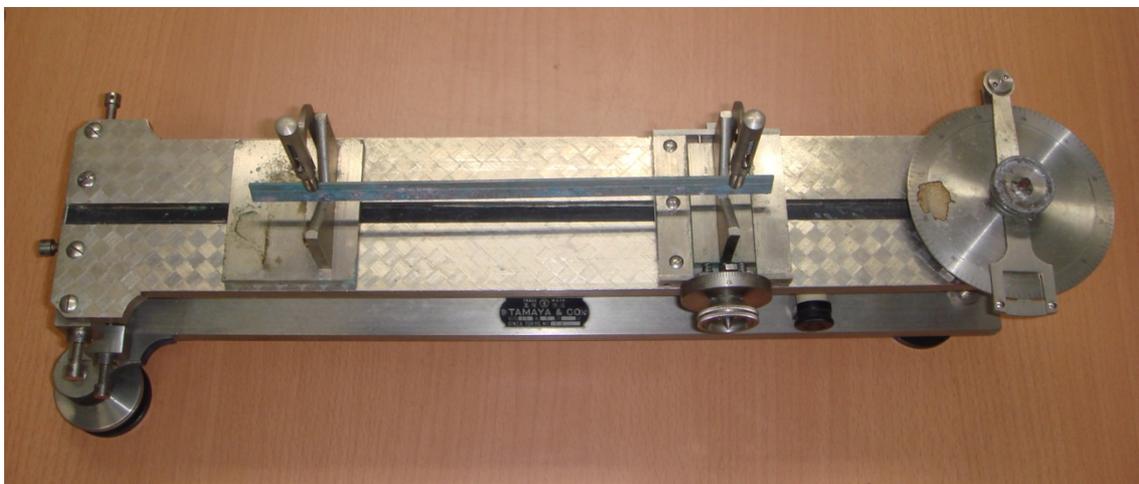


写真7 上から見たところ、なかなか重厚である。